

食品嗜好の適応性に

関する研究

長野県立保育専門学院 小松 卓郎

諏訪市豊田診療所 矢島 千代

日常のあらゆる努力や一般知識の普及にもかかわらず、倫食矯正への抵抗には根強いものがある。さきに新潟大学儀間博士および鈴木博士は小坂動態的体質学において、SE型とWM型とは、消化器の生体機能および基礎代謝に対蹠的な差異のあることを明きらかにした。よってわれわれは、倫食には、単なる環境的なもののみではなく、体質的なもののある事を想定して、園児・小・中・高校生および成人（工場、農村）など、計二八九〇名について、偏食の基盤とも解される食品嗜好の実態を調査し、食品各別、類別、系別の外、調理法をも含む総合的な嗜好角度を追究した。その結果、SE型は明きらかに「しつこい味つけ（脂肪性）の食品」肉食系への嗜好性を示し、WM型は「あっさりした味つけの食品」野菜、含水炭素系への嗜好性を示すのを認め、且つまた、前者は刺戟興奮性の、後者は非刺戟性の嗜好飲料、さらに前者は「食欲のむら」多く、後者は少ないなどの成績を得、総合的にSE型は動物性、WM型は植物性食品に——儀間、鈴木両氏の業績と照合すれば、それぞれの体質に適応した嗜好に傾くことを立証した。その反面、この傾向に反する食品の強制は、園児に食卓または食品ノイローゼ、抵抗ないし反抗、劣等感、虚偽、羨望、身体障害などの犠牲をもたらすような諸

経験例の多数を得、さらに、倫食見必ずしも虚弱多病とは、軽卒に断定し得ない既往症および罹病傾向の成績と、これを裏づけるかのごとき家庭での観察成績の若干を得て、ここに本課題の基礎的研究の一部として報告した。すなわち本研究の目的は、倫食の肯定ではなく、偏食の要因には根強い体質的なもののあることを明きらかにすることによって、矯正にはその体質適応の嗜好方向から進むべきものとする——その科学的論拠を得んとしたものに外ならない。

遊具の所有化される過程（第3報）

新潟県柏崎高等実践女学校

桑 田 明 子

前二回の研究に引き続き今回も遊具の所有化される過程についての研究である。第一回の研究は東京の新宿にあるデパートの玩具売場で観察をおこなったがその対象は主として山の手階層の子どもとその親であった。第二回の研究目的は遊具の所有化の過程が地域によってどのように相違するかみようととして場所は工場街を背景にしている川崎の「さいかや」デパートでおこなった。今回の研究は更に農村を背景とした地方都市である新潟県長岡市の「大和デパート」を選んだ。観察の対象となったケースは五七ケースである。結果の整理は第1は所有化の型、第2は親子関係と禁止の数、第3は禁止の理由、第4は親子関係と玩具要求数、第5は年令との関係、第6は同伴者との関係、第7は満足状態についておこなった。観察の対象となつた五七ケースの内訳は幼稚園以下と思われるもの一八、幼稚園々

児と思われるもの一八、小学校児童と思われるもの二一でいずれも母親または父親または家人が同伴している。結果について述べる。(1) 所有化の型では山の手よりも工場街、工場街よりも農村地帯が親中心に傾く。

(2) 親子関係と禁止の数では三地域の差が見られる。すなわちことも中心では山の手および工場街では禁止のあるものが多いものがほぼ同数だったが、農村地帯では禁止のあるものがずっと多い。親中心では山の手地域では禁止のあるもの無いはほぼ同数であったが、工場街および農村地帯では禁止のあるものがずっと多い。

(3) 禁止の理由および玩具要求数は地域差は見られない。

(4) 親子関係と子どもの年令では幼稚園以下では三地域とも親中心に傾いたが、幼稚園の場合は工場街および農村地帯ではかなり親中心に傾き小学校においては山の手および工場街では子ども中心が多くなっているのに農村地帯では依然として親中心に傾いている。

(5) 同伴者の場合は父親同伴の場合にだけ差が見られ山の手から工場街、工場街から農村地帯へと子ども中心が減っている。

(6) 満足状態では工場街および農村地帯では一定の傾向が認められず山の手に比べて、子どもが玩具を手にした時の表現からはそれを捉えにくいということが言えるように思われる。

「言語経験を豊かにするための

絵本による指導法」について

神戸聖公幼稚園 笠井謙守

マス・コミ時代の、しかも、成熟期年令低下の叫ばれる現今、絵本の教育的価値と、積極的な言語経験の育成すなわち文字に気づいた子どもの指導法の一端を、詩的なカルタつくりの具体例をもとにして考慮した。先ず快適な環境設定であるが、教師の温い態度と、落ちついた雰囲気と、常に新鮮味のある部屋や設備すなわち、喜んで絵本をみたくなる場の構成などの環境を整備設定すること。これにより、みんなで絵本をみようとする興味と意欲が盛んになり、そこで言語指導も、幼児のこよなき喜びの場となるのである。

したがってその理想的な環境整備と共にそれが指導計画においても、教師は常に備え付けの絵本に精通し、絵本の指導も教育計画の中に系統的に織り込み、有効適切な計画をたてるのが大切である。

次に、絵本による指導法としては、プリント一九八頁にあげてみたが、これらの言語指導のみりとして、十二月から一月にかけて年長組を対象とした詩的なカルタ遊びの具体例を申し述べる。(プリント一九七頁経験の箇条書参照) この遊びによる教育的効果は、プリント一九八頁の六項に大別出来るのである。

幼児向絵本に関する調査

(その1) 幼稚園における絵本使用の状況

埼玉大学 野間郁夫

国立国語研究所 村石昭三

東京魚籃幼稚園 山田巖雄

東京学芸大学付属幼稚園 高杉自子